S-1-1 肺がん小細胞癌切除例の組織像からみた悪性度
国立病院九州がんセンター病理科
○横田 弥三郎

肺癌の悪性度を形態学的に検討し、予後を推定する
ことは臨床的にも意義が大きいと思われる。検討では、
47年より60年未満に当院で切除された1期から3期迄
の非小細胞癌のうち予後の明らかでない45症例について、
病理組織像、亜型、分化度、脈管浸潤、質問反応等を
の諸因子について予後の関連を報告すると、現在61
年より63年未満の症例90例について追加検討中で、
これらを加えた成績を報告する予定である。

扁平上皮癌における病理期別5生率は、Ⅰ期55%、Ⅱ期
56%、Ⅲ期48.8%であった。腺頭型腺癌のそれは、Ⅰ期
60.5%、Ⅱ期28.6%、Ⅲ期16.7%であり、腺癌型のそ
れは、Ⅰ期76.2%、Ⅱ期33.5%、Ⅲ期7.5%であり、腺癌は
切片時の病理が予後に大きく関係する。1期扁平上皮
癌73例における分化度、腺癌のそれは、Ⅰ期55%、
Ⅱ期46.8%、Ⅲ期37.8%で、扁平上皮癌の悪性度が同様で、
腺頭型腺癌の成績もほぼ同様である。腺癌型腺癌のや
く、脈管浸潤の有無の予後に関する意義は大きく、
悪性度の悪化例の約1/2の生存者であった。腺癌
における腺癌形成は、予後不良因子と考えられる。

大細胞癌の予後は完全に不良であるが、組織型に関して
なく、質問にリンパ球等の炎症細胞浸潤の強いものや
肉芽組織形成を伴うものは予後良好であった。

S-1-2 境伝子異常からみた肺がん小細胞癌の悪性度
国立がんセンター研究所がん転移研究室1、同病院
脳外科2、群馬大学医学部病理学第二講座3
○横田 淑、鯨島勇一、西川高2、中島栄3

がんの分子遺伝学的研究の発展により、がんの発生
及び悪性化の過程が細胞内の遺伝子異常との関連で
把握されてきた。特にがん遺伝子、がん抑制遺伝子の
研究は、がんの病態を遺伝子レベルで解明する道を見
ている。ここでは肺がん小細胞癌の悪性度とがん遺伝
子、がん抑制遺伝子同様の関連性について、我々の
研究成果を中心に挙げたい。我々は先に、肺小細胞
癌ではほぼ100%の症例で第Ⅲ、Ⅳ、17染色体
が常に欠失していることを見出した。小細胞癌
でも同様の欠失は低頻度で見られたが、組織型や悪性
度との関連性は明らかでなかった。そこで、非小細胞
癌転移細胞における染色体欠失について検討を行った
ところ、小細胞癌と全く同様に、第Ⅲ、13、17染色
体の欠失が100%の症例（10例中10例）に検出され
た。また、c-ErbBががん遺伝子の増幅も原発巣に
比し転移細胞で極めてよく検出された。これらの結
果は、第Ⅲ、13、17染色体上のがん抑制遺伝子な
がらびにc-ErbBががん遺伝子の異常が組織型を問わず肺
癌の悪性度と密接に関連していることを示唆している。
現在、第13、17染色体上のがん抑制遺伝子として
同定されたRb遺伝子、p53遺伝子の変動についても
検討を進めているので、その結果も合わせて報告す
る予定である。

S-1-3 DNA ploidy 並びに増殖関連因子からみた悪性度
長崎大学医学部第一外科
○田川 私、川原信信、駒部公則、富田正雄

当教室では肺がん小細胞癌219切除症例のパラフィン包埋組織
を用いたFCMによる核DNA量の評価を行ってきた。その結果、
DNA Aneuploidyの出現率は81.3%と固形癌の中でも高頻度で、
5生率はDiploid症例で82.4%、Aneuploidy症例で38%と再現に
有意差(p<0.01)を示し、更に、stage別ではⅠ期とⅡ期におい
て有意差(p<0.01)を認め、Ⅲ期においては有意差を認める限り
なかった。DNA index(DI)について検討すると、扁平上皮癌と腺
癌ではその分布様式が異なり、より予後とDIとの間に一定の
傾向を認めることができなかった。しかしながら、再発期間とDIとの間
に有意差がないものの、肺転移(DI平均1.16)と脳転移(DI平均
1.91)との間に関値の有意差(p<0.05)を示し、最近のDNA量以外に
もなくの細胞増殖増殖関連因子が研究されている。そこで、癌関連抗
原を認識するモノクローナル抗体Ki67を用い、免疫染色検
することで2例のLabeling index(LI)を評価した。その結果、
扁平上皮癌は腺癌より有意に高価であったが、stage別で有意の差を
認めることはできなかった。ポリメラーゼαの染色もKi67の結
果とはほぼ同様であった。更に、EGFとC-erbB-2の免疫染色検
査を予後判別した45例について検討した。しかし、stageや予後
との関連性を認めることができなかった。

結論: 本DNA量と増殖関連因子からのみの細胞生物学的悪性度を検討
したが、癌関連因子の意義は今後の課題であるが、客観評価可能
なDNA ploidyとDNA indexは非小細胞癌の悪性度評価に有用
であった。